

(1)

かねてから待望せられていた戒浄上人の『真実の自己』関東篇が関係者のご努力によってここに刊行せられた。

江戸末期以後、西欧の學術文化が滔々として日本に流入するに伴い、例えば仏教語の「宗教」が英・独・仏等の西洋の religion の訳語に充当せられ、また「古代哲学」といつても、印度や中国にも哲学はあつたが、普通古代哲学といふのは、西洋でいう philosophy (哲学) の源、古代ギリシャ・古代ローマの哲学、といつてもほとんどはギリシャ哲学を意味する。それは前六世紀のミレトス派に始まり、プロティノスの学統をつぐギリシャ最後の哲学派である新プラトン派の後六世紀前半の五二九年まで続く。

さて、観念論と唯物論の対立は、いろいろな形で古代から現代にいたる哲学史全体を貫いているが、観念論の観念とは、本は真もと如または仏、浄土などを觀察思念するという仏教語であるが、現在では西洋語の訳語として種々に使われ

ている。戒浄上人は普通は二種に使用していられた。(1)はプラトンの形而上学的意味での訳語として。換言すれば個人の意識を越えた非物質的な永遠不滅のものとして、古代および中世のヨーロッパ哲学史に見られる意味である。(2)はデカルト、ロック以来の用法で、心理学上の表象(独 *Vorstellung*, 英 *presentation, representation*)と同一の意味として、近世以来今日では最も広く用いられている。

そして(1)の意味で観念の根源性を主張する立場は客観的観念論と呼ばれ、(2)の意味で観念の根源性を主張する立場は主観的観念論と言われる。いま客観的観念論者はプラトン (Platon 前四二七〜三四七) ギリシャの哲学者、ソクラテスの弟子)、その考えに通ずるヘーゲル (Hegel 一七七〇〜一八三一) ドイツ古典哲学の最大の代表者、彼の用語では「絶対的観念論」、また東洋では朱子学の哲学などである。(朱子 一一三〇〜一二〇〇) 朱熹の尊称、朱子学を大成した。三綱五常を永遠不変の原理天理の至として理論づけた。)次に主観的観念論者はバークリー (Berkeley 一六八五〜一七五三) アイルランド出の聖職者)で、主観的観念論の典型的代表者である。また東洋では陽明学派である。(明代 みん 一三六八〜一六六一) 中期の代表的哲学者かつ政治家の王陽明 一四七二〜一五二八) が朱

子学に対して説いた知行合一、静座法、致良知を原理とする実践的な主観的観念論。日本では中江藤樹、熊沢蕃山、佐藤一斎、大塩平八郎等）それから主観や自我を超個的と考へるカント(Kant 一七二四―一八〇四)やファイヒテ(Fichte 一七六二―一八一四 ドイツ観念論の代表的哲学者)の観念論も、主観的観念論に入れられることがある。それは現象のもとをなす物自体(独 Ding an sich カントの用語)を不可知として残したカント哲学の二元的分裂を、主観的観念論へ徹底させることで克服しようとしたものと解されているからである。しかしカントではこの語はまた超自然で経験不可知の「神、自由、靈魂不滅」という存在をも指している。

(注) 弁栄聖者光明大系『光明の生活』(本部版)六十五頁の「欣慕ごんもは自然悟道じねんの密意みつち」の六十六頁一―二行目の『大原談義』の法然上人のご垂示「人をして欣慕せしむる法門は暫く浅近せんこんに似たれども、自然悟道の密意は極めて是深奥これなりと」を戒浄上人は上記(1)の意味をもって私共にご説明下さった。

次に日本ではドイツ語のヴェルトアンシヤウウング(Weltanschauung)としてしばしば使用されている世界観(world outlook)の基本的なものは、哲学的見解であり、それは精神と物質の何れを根源とするかということによって、

いわゆる観念論と唯物論の世界観の基本的性格が決定される。この観念論と唯物論の対立は、上述のように古代から現代にいたる、哲学史全体を貫いていると言われるほど、哲学史と共に古い。エンゲルス (Engels Friedrich 一八二〇—一八九五 マルクスと共に科学的社会主義理論、弁証法的唯物論の創始者) は、その著『フォイエールバツハ論』(一八八六)の中で、彼のいわゆる「哲学の根本問題」(fundamental question of philosophy) について論じている。要約すると、「精神的存在も物質的存在も含めて、存在する一切のものは、これら兩者のいずれを根源的とするかにあると言うことができる」と断じている。

なお付け加えておくが、物質主義 (materialism) という言葉があるが、(1) 精神的なものを無視して、衣食住などの問題を第一義とする立場。(2)は唯物論と同じ、の二種に使用されている。岡潔先生(一九〇一—一九七八 数学者、*へ多変数解析関数論*)の未解決の問題を解決し、世界の注目を集めた。学士院賞、朝日文化賞、文化勲章受賞、奈良女子大名誉教授)は専ら(1)の意味で使用されていたので、今はそれに倣って、(1)の意味だけに使用し、(2)の意味では専ら「唯物論」の表現をもってする。またそれと関連して、日本では西田哲学や田辺元哲学は一時いわゆる京都学派と称せられた哲学派の源流となったが、これ等は観

念論と唯物論とを乗り越えた、より高度な第三の立場の意味で普及したが、マルクス主義唯物論哲学では、経験批判論や実用主義、新実証主義、実存主義等を含めて主観的観念論と見なしている。そして現在の新トマス主義は客観的観念論の代表と見なされている。

(二)

戒浄上人は十六歳の頃、『生死輪廻論』一卷を著わして、その最後の結論に「上来述べ来た処は、古来仏教に説く一切唯心の思想を基底とするに非ざれば、遂に空論に帰すべし」の一句を添えられた。ところがこの著述を見て懇ろに批評を朱で書き添えられたのは、当時鎌倉大仏殿に避暑中の野上運外師（一八六七—一九四五 静岡宝台院住職、昭和六年東京増上寺大本山執事長、浄土宗執綱、また仏教専門学校「現仏教大学」教授）であつた。殊に最後の結語に対する批評中に「此の一句実に千鈞の重みあり。但し此の一事、一切唯心の理、世に隠れて歳すでに久し。然らば此の理を解明し広くこれを世に伝ふるを以て汝が終世の任となすべし」なる義を述べられた。時に上人はむしろ意外の感に打たれた。一切唯心の理は、仏教においてはすでに日常茶飯の常識、しかるにそ

の解明の困難なること、又擬するに広く此の理の世間に宣布せられることを希望されたことである。それで上人は、尋常一様の研究、或いはいたずらな読書の更に効のないことを痛感し、これを今後の読書研究の指針とされた。「だから私はそれ以来、知識欲のために読書することを止めて、一路解脱のために読んだ」と述懐していられる。かの十一年間の思索中、「着々事実を観察することをもって終始一貫し、この間の指導書とされた『瑜伽師地論』(弥勒説、唐の玄奘訳、百卷)その他の聖教を拝すること、所によつては恐らく数百回に及んだこと、また浄土宗相伝の書物を拝読、その要所は一々此れを摘録して一巻をなし、その後反復拝読の度ごとに、あるいは増補しあるいは朱をもって注を付すごとき、後年弁榮聖者に師事されるに及んで全く聖者に傾倒し、一言半句その金口の慈教をゆるがせにされることがなかった。

東大においては哲学科に籍を置いて心理学を専攻、研究室の主任元良勇次郎博士に上人は学校で先生の指導を受ける一方、唯識の心理説に関し、既に多少見聞悟得の境を毎週二日宛先生の自宅に通つて種々所見を申し上げ御参考に供した。卒論は「成唯識論之心理説」で、これが審査に当たつた村上專精博士の講評が開巻の初めに付せられている。その中に「古来仏教ニ於テ最モ難解ニ属ス

ル唯識論ノ心理説ヲ輓近ノ学理ニ基イテ究明シ而モ其ノ衝ヲ誤ラサルハ大イニ多トスル処ナリ」(取意)と記されてある。その後数年間大学院に在つて研究を続ける一方、催眠術に多少の興味をもつて約二ヶ年間種々の実験を試みられた。その中心は主として千里眼透視による実験で、件数約六十数回に及んだ。

その実験の結果、多年仏教に言う三昧なる心理状態は、あるいは病的現象にあらざるやの疑問、ならびにこれに関連した幾多の問題に対し肯定是認の断を下すことができ、信仰上にも多大の指針を得た。

東大卒業後大正三年にいたる前後滿八年に及んだ宗教大学、天台宗大学において一般心理学のほかに特殊心理学と題して専攻の「真我の实地認識」に関する講義をなしたが、これは晩年『真実の自己』、あるいは『覚明(わかり)』と題して講ぜられるにいたつたものである。これについて上人は「この覚明わかりの話は自然界と心靈界(有為轉變の世界と無為泥洹の世界)とをつなぐ唯一の橋渡しだから、これからも私の息のある間は機会あるごとにできるだけ沢山の人々にお話する心算だ。顧みるとずっと以前に比べて、その言わんとする所及び内容において何らの変化はないが、その表現の仕方ならびに順序方法においては種々苦心工夫の結果、格段の変化を見るにいたつた」と述懐された。実

にこれは上人が心血を注がれた畢生の事業であつた。晩年弁栄聖者に師事されるにいたり、聖者を『現代の釈尊』と仰がれた上人が、「聖者から」笹本の覺明は如来の平等性智を説いたものだ。よくぞやつた」とのお褒めのお言葉を頂いた」と、法嗣故浄光法兄に向かつて、にっこりと微笑された。浄光法兄は「その笑いはかすかではあつたが、何かしら潤いを含んでいた。しかも私は此の微笑の中に、父の経來つた多年の辛酸艱苦が、聖者のこの一言によつて一時にしかも十二分に報いられた喜悦と、父をして最後の瞬間にいたるまで一人でも多くの有縁の人をして、『真実の自己』に覚醒せしめんと、倦まず弛まず、微より細をうがち、終止一貫変わるることなからしめた源泉を、洞觀し得たように思う」と述懐していられた。

このように戒浄上人はお別時のときに「夜話」として「数日かけると、念仏しなくとも事実と首つ引きで、その一端を把握することができる。しかしそれは解脱ではない。それゆえ素直に如来様のお光明にお縋りしたいものである。本来、仏種という言葉は梵語の翻訳であるが、同じ言葉であつても色々の意味が違つている。『大般涅槃經』には「仏性は真我、譬えば金剛の如し、毀壞すべからず」とあつて、真実の自己、真我すなわち、いつも変わらぬ在り通しの



自己のことである。しかし『華嚴經』には「私共には本来仏性はあるが、それは華の中の雌蕊の如きだ」とある。雌蕊だけだと、ついに地面に落ちて腐ってしまうが、雄蕊の花粉を受け熟して地面に落ちると種を結ぶ。それが熟すれば生命あるものとなる。如来の光明は雄蕊の花粉の如きもの。それを受ける素地が仏性であつて、それが雌蕊で本来備わっているものである。換言すれば、如来のみ光が仏性の中に頂ける、すると仏種という。従つて仏種は本来あるものでない。勝れた教えを聞き、如来をお慕い申して一心にお念仏する。それで「仏種は縁より生ず」と言う。その意味から言えば、仏性とは雄蕊の花粉を受くべき雌蕊である。ますます頂くと、仏種は双葉を出し実を結ぶ。そのためには弁栄聖者提唱の「感謝の念仏、請求の念仏、請求の念仏、三昧の念仏」の中の、光明獲得、神人合一の「三昧の念仏」を行じなければならぬ」と。

(三)

上來述べた所を集約すると、観念論とは、物質に対する観念的なものの根源性を主張する立場、唯物論とは、精神に対する物質の根源性を主張する立場ということになる。

ヴント (Wundt, Wilhelm 一八三二—一九二〇) 実験心理学の確立者、ライプツヒ大学教授) と共に世界の二大心理学者と称されるジェームズ (James, William 一八四二—一九一〇) アメリカの心理学者で哲学者) は、その著『心理学』(岩波文庫、今田恵訳) 上巻の第一章序章で、次のように述べている。

「例えば、すべての自然科学は、一步深く考えれば観念論に行き着くはずであるにもかかわらず、物質の世界はこれを知覚する心とはまったく独立して存在することを当然としている」そして更に「心の状態についての完全な真理は、認識論と合理的心理学とがその語るべきことを語り尽くすまでは分からない」と言っている。そして心の本質真相について、不完全な認識論と合理的心理学に依存して、物質の世界がこれを知覚する心とは、全く独立に存在することを許容しているような自然科学は、不完全な暫定的知識体系に過ぎないことを主張している。

認識論と心理学に関して、ジェームズの言っている「語るべきことを語り尽くす」という方向に徹底的に進むならば「人間の奥底深く潜在していて、極めて特殊な方法でなければ開発できないために、普通一般には全く未開発のままに放置せられている認識能力の有無を徹底的に検討しなければならぬ。肉体

を持つ人間であるから、一応は脳髓を通すけれども、脳髓に従属しない正常健全な認識能力がすべて開発せられる方法を明瞭にし、人間の實現可能なすべての認識能力の性能を比較対照検討する。このようにして諸科学を正しく追求できるようになる」(取意)と戒浄上人はおっしゃった。

人間の實現可能な認識能力に関する上記の問題は、戒浄上人の恩師である弁栄聖者(一八五九〜一九二〇)は、その体験上より解決しておられた。(弁栄聖者光明大系『無辺光』その他の遺稿集、光明会本部刊)また後継者戒浄上人(一八七四〜一九三七)もまたその様にあらせられた。

以上、弁栄聖者、戒浄上人の認識論を所依として、華嚴宗第三祖、唐の法蔵賢首大師の説を借りれば、将来発達すべき人間の境行果より見れば、現在の私共のレベルは未だその初期段階と言っても過言ではない。早く肉の心の拘束より脱し、お互いに策励互映して求道者としての向上の一路を進みたいと思う。

今は昔、三木清(一八九七〜一九四五、法政大学教授)は一高より西田幾多郎博士(一八七〇〜七九四五、京都大学教授、*「絶対矛盾の自己同一」*を核心とする「西田哲学」を展開された)を慕って京大に入学した。当時は西田先生をめぐって三木や戸坂潤(一九〇〇〜一九四五、法政大学教授、「唯物論研究会」の創立者

兼指導者) その他が議論を戦わせておった。「夜ふけまで又マルクスを論じたりマルクスゆゑにいねがてにする」(昭和四年)と西田先生のお歌があるほどであった。ところが二十世紀末の現在、物質主義すなわち人間の物心活動の對象化、人間の諸能力の物象化ないし商品化の猖獗しやうけつを極める現在、『真実の自己』(関東篇)がこの度出版の運びに至つたことは時期的にまことに有り難い極みと言わねばならない。是非大方の必読こいねがを希う次第である。

終わりに月刊「光明」の前身「大光明」の昭和十三年七月号第九十六号に登載せられていた当時松山高校、現愛媛大学の教授であられた故川本正良先生の戒浄上人讚歎のご名文をもって、甚だ恐縮ながら此の拙稿の「結語」の代りとして画竜点睛を乞い奉る次第である。

(光明会本部主宰)

\*\*\*

人中獅子

川本正良

故上人を偲びまつる毎に、折にふれての温顔ほんげん髣髴ぼうふつと浮び出づるが中に、とり

わけ鮮かに思い出でらるるは、信州唐沢山に於ける一場景である。

日想観を修するとて会衆一同書院に居並ぶ。故上人を親とも慕いて全国より馳せ集つた篤信の人々である。会衆の前に上人縁端近く端座したまう。前には唐沢山の翠巒すいらんなだれて底に諏訪湖一大鏡面を展ひろげ、その向うの日本アルプスに今し太陽没せんとして、山河大地会衆一同を唐紅に染めている。今迄見た内でも最も莊嚴な光景の一つである。此時の故上人の御内観は凡夫の測り知るべからざるものであるが、末座に列した自分は涙の滂沱ぼうたとして下るを禁じ得なかつた。今自分の前に故上人御揮毫きごうの、人中獅子雖有去来常住不変。の短冊がかかつて居る。故上人の歩み給いし道は險阻であつた。滔々とうとうと世界を風靡した唯物論は、最も聡明に在した丈だけけに、最も猛烈に上人を打ち倒した。「斯くの如くして十八歳の時信仰一度根底より覆くつがえされてから後、約十一年にして一分の真理の光明に触るる事を得ましたが、——随分苦しい思いを致しました。」ああその御苦闘の十一年。「暑中休暇にも毎日朝の八時頃から夕刻四時頃まで一室に閉ぢ籠こもり仰向けに寝て天井と睨みっこ、——此の為か夕方風呂に這入って手拭いで頭を撫でると痛みを覚え、毛がどっさり脱けて落ちると云う有様であります。」

然し上人は遂に人中の獅子に在した。時代の悩み唯物論を粉碎し、人類の苦、無明を超えて、常住不変の御身とならせ給うた。夕陽に染まりし故上人の御姿に、自分は一人の大勇者、一世の英雄を見奉ったのであった。

(注) 川本正良先生(号は臥風、一八九九〜一九八二、その遺著「ゲータと鷗外」付

宗教随想『睡蓮』。「人中獅子」はこの12〜13頁に収録されている。発行者は「川

本臥風著作刊行会」愛媛大学高橋信之研究室内。昭和五十九年四月一日刊。)

